

法政大学大学院	学	赤松 威志
法政大学	正	渡部 與四郎
法政大学	正	宮下 清栄

1. はじめに

都市は人が生活し、働き、憩う環境であり、得に近年、国民の生活環境の向上の気運が高まる中、快適で潤いのあるまちづくりをアメニティの面から捉えることが重要視されている。なかでも視覚的側面を持つ都市景観の役割は大きいと言える。そこで本研究では市民参加型のまちづくりを目指し、景観構成要素と市民の心理量との相関性を把握し、今後の景観整備の方向性と整備後の効果を探る上での重要な資料を得ることを目的とする。なお、景観評価の際、通常スライド写真提示による方法が実施されているが本研究ではコンピュータ・グラフィック（以下C・G）を用いた動的、立体的な景観像を作成し評価実験を試みた。

2. 研究方法

研究方法をフローチャートに示したのが図-1である。景観評価実験では市民参加による街づくりを目指し、武蔵野市148名を対象にスライド写真画像による街路景観、また国分寺市民24名、小金井市職員16名を対象に国分寺駅北口前のC・G景観の2種類の評価実験を行なった。スライド写真景観では、武蔵野市の街路の中から14景、東京都内の代表的商業地景観8景、イラスト2景、画像処理により修正した景観7景、計31景をすべてスライドで提示した。尚、修正景観に関しては、それに相当するコストを提示し、その反応を調べた。またC・G景観は中央線国分寺駅北側地区をモデル地区として現況モデルと都市計画図に適合させた修正モデル、更に精密に修正したモデルを作成した。評価にはC・Gアニメーション景観5シーン、スライド景観17景を提示した。評価方法はスライド写真景観では16形容詞対、C・G景観には15形容詞対を用いて、ともにSD法（形容詞対評定尺度法）による7段階評価で行なった。またC・G景観に対する理解度を求める項目も設けた。

3. 分析・結果

スライド写真景観では得られたアンケート結果から形容詞対をもとに各景観の特徴を把握した。次に被験者が景観に対してどのような要因で評価したか探るため因子分析を行ない、3因子が抽出された。第1因子は快適性、第2因子は活動性、第3因子を親近性と考えた。次に各景観毎の因子得点を先の因子を軸にプロットしたものを図-2に

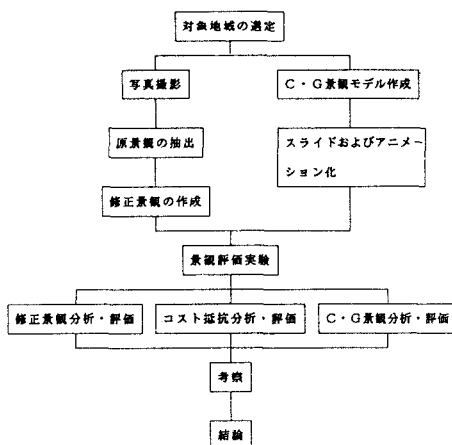


図-1 研究の全体フロー

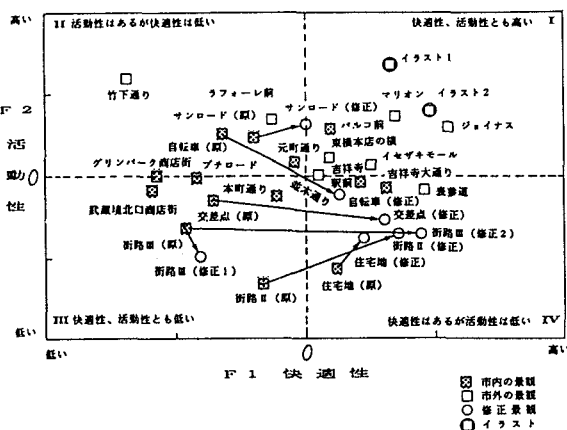


図-2 因子得点による景観のプロット

示す。「快適性」が高く評価されたものは横浜ジョイナス、イラスト2、表参道、街路Ⅲ(+)等であり、「活動性」では竹下通り、イラスト1等であり、いずれも人が大勢集まり、にぎやかで華やかな場所である。また「親近性」ではグリーンパーク商店街、イセザキモール、住宅地A(+)等であった。次に景観構成要素と各因子の関係を把握するために、構成要素と因子得点を用いて数量化理論1類により分析を行なった。その結果、車道占有率0-20%、歩道占有率20%以上、緑視率0-10%、低木と高木の組み合わせたもの、放置自転車を除去したものが3つの因子とも向上させている。特に緑視率は約35%程度までは快適性の評価は増加するが、それを越えると評価は減少に転じる。また、一般街路に比べ、繁華街の街路は少しの緑視率を増すことにより快適性を向上させる。コスト抵抗に関しては個人負担の少ない整備に積極的な反応が示された。C・G景観では被験者のC・G景観に対する理解度を調べ、半数以上は感覚的には理解されている。また因子分析を行ない、親近性、空間的属性を表わす2因子が抽出され、これを軸に各景観のプロットを行ない修正前後の反応を調べた結果、やはり修正後の方が評価が高かった。

4. 結論

因子軸上の景観プロットより現在の武蔵野市の街路景観の位置付けが把握でき、今後「快適性」、「活動性」、「親近性」を高める方針で整備していくことが望ましいと思われる。数量化理論1類より車道、歩道、緑などの景観構成要素が3因子を向上させており、景観整備にはまず次のことが重要と考えられる。①道路などの公共施設の整備 ②公共空間と私的空間との間に準公共空間を設ける。

コスト面では、30万程度であると景観向上のために個人で負担可能な額と思われる。C・G景観に関しては感覚的には理解され、さらに精密に作成すれば理解度が高まり、合成画像のスライド写真と同様に景観評価においてその実用性が期待できることがわかった。また因子分析を行ない2因子を抽出することができたが、景観構成要素の内容が不十分なため因子との相関性を明らかにするまでにはいたらなかった。

5. 今後の課題

- ・景観作成時間の短縮とさらに多くの構成要素についても考察し、データを蓄積するとともに、景観の予測評価の信頼性を高める必要があると思われる。
- ・景観整備においては、公共空間を改善し、私的、準公共空間も踏まえて検討しなければならないと思われる。
- ・修正の度合に対する市民の直接享受しうる効果・便益＝「景観ベネフィット(B)」の定量化と「コスト抵抗(C)」との関係を明らかにしていくことが重要であると思われる。
- ・C・G景観を容易かつ精密に作成し、これを立体(3次元)的に捉えさらにスライド写真による断面(2次元)的な捉え方と合わせて総合的に景観を評価することが重要であると思われる。

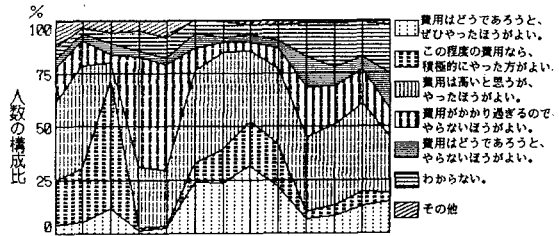


図-3 コスト抵抗

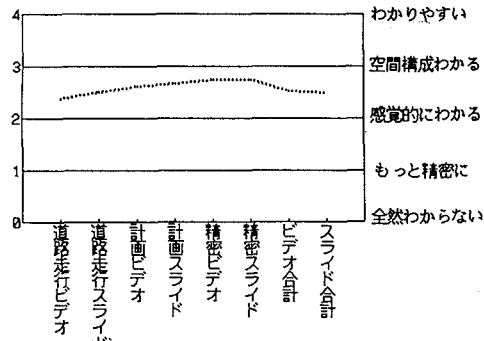


図-4 C・G景観の理解度